

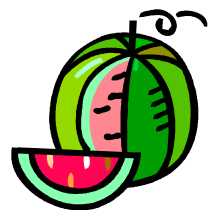
青丘文庫研究会 月報 No.255

2011年7月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 在日朝鮮人運動史研究会関西支部(代表・飛田雄一)
 朝鮮近現代史研究会(代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 他に、青丘文庫に寄付する図書を購入費として2000円/年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

戦前の富山県のダム工事と朝鮮人労働者 砂上昌一



ゴールデンウィークが始まると富山県の宇奈月から樺平までトロッコ電車が運転される。黒部渓谷沿いの新緑の中を走るこの電車は黒部観光の目玉となっている。

この黒部川に建設された黒部川第三発電所(1936年着工40年完工)は高熱地帯に隧道を掘削するという難工事で多くの犠牲者を出した。黒部渓谷の険しい地形でのダム建設は困難を極めた。この工事については吉村昭著『高熱隧道』に詳しい。冬季には雪崩に飯場が流されるなど労働環境は常に死と隣り合わせであった。この危険で困難な隧道工事や軌道の敷設工事には多くの朝鮮人労働者が従事した。ダムの完成は朝鮮人労働者の犠牲の上にあったことを忘れるわけにはいかない。

富山県の電源開発事業が始まった1910年代にはすでに朝鮮人労働者が立山の砂防工事や庄川などの県ダム工事などに従事するようになっていた。県の電気事業には180人の朝鮮人労働者が従事していた。「富山日報」(1922・9・15)20年代後半になると黒部川水系や庄川などの電源開発事業が本格化するにともない朝鮮人労働者の数も4千から5千人までなった。これらの工事に従事する朝鮮人労働者の雇用形態や環境は不安定で労働は過酷であった。そして事業主は雇用の安全弁として朝鮮人労働者を使用してきた。「北陸タイムス」(1925・12・5)

これらのダム工事に従事していた朝鮮人労働者は冬季になると失業した。下山を余儀なくされた朝鮮人労働者は雪が解けてダム工事が再開されても雇われる保証はなかった。そこに昭和不況が追い打ちをかけて失業する朝鮮人労働者をさらに困窮させることになった。「富山日報」(1927・9・18)

27年ころには再び富山県の朝鮮人労働者は約3千人になっていた。「富山日報」(1927・8・25)しかし彼らの生活状況は厳しく失業した朝鮮人労働者は富山市内や近郊の町に掘立小屋を立てて住み着くものも出始め住民とのトラブルも生じることがあった。28年12月末には県内の水電工事関係の朝鮮人労働者は一時的に千人にまで減少した。「富山日報」(1928・12・13)

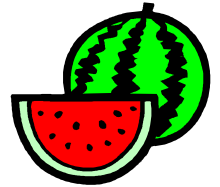
このような失業状況を緩和したのが失業救済事業であったが朝鮮人失業者にはそれほどの恩恵はなかった。求職カード登録の煩雑さや独身男性という要件が救済事業から必然的に朝鮮人が排除されることになった。また、救済事業の目玉になっていた国道改修工事でも不当解雇や賃金引き下げなどが行われた。富山県の労働争議は直轄工事の国道改修工事や水電工事関係によるものが多かった。27年には朝鮮人労働者は日本人労働者との差別待遇や労働条件の改善を訴えて「白衣労働信友会」を立ち上げた。「富山新報」(1927・8・22)白衣は朝鮮服のことであるが、彼らは集会ではこの朝鮮服を着用して集会などに参加した。31年7月の地元紙によると県内の失業カードの登録者は日本人2千5百人に対して朝鮮人は四百人であった。(富山日報)(1931・7・15)33年1月には失業した朝鮮人労働者は家族を連れて富山市役所へ

仕事をよこせと陳情することもあった。「富山日報」(1933・1・29)

37年からの日中戦争に入ると電力需要はひっ迫し第三発電所の建設は急がれた。それは国家的な電源開発事業であった。そのため工事による事故が多発し37年には隧道工事ではダイナマイト事故によって初めて朝鮮人労働者の犠牲者がでた。「北陸タイムス」(1937・7・23)また、38年12月の黒部川仕合谷で飯場が雪崩に流され朝鮮労働者32人、富山県人33人、その他の県外の労働者18人の死者、行方不明者がでた。「富山日報」(1938・12・29)

このように朝鮮労働者に多大の犠牲を強いた黒部川第三発電所は40年に完成した。この後、黒部川第四発電所の建設とつながっていくのである。この建設の様子は映画「黒部の太陽」として映画化された。

このような巨大事業の陰に朝鮮人労働者の存在があったことを知っておくことは大事なことである。多くの観光客を乗せて何事もなかったように今日もトロッコ電車は黒部渓谷を走る。



第325回在日朝鮮人運動史研究会関西部会(2011.5.8)

戦前、戦後を経験した在日女性の聞き取りから ～「死生観」、「恨」～

李裕淑

在日一世、二世の聞き取りも盛んになり、在日女性たちの生活史のライフヒストリーも発表されるようになった。しかし、在日女性たちの死生観や、その思いを考察することは始まったばかりである。

ここでは儒教的チェサによっては祭られない霊をどのような形で祖霊として祀るかを聞き取った。チェサを継続するということは祖先を祭ることであり、儒教的教えの根源である「孝」を尽くして、それを受け継いでいき、自らもその孝を尽くされる対象となることだが、それに組み入れられない霊の怨恨とチェサをしてあげられない者の恨(ハン)と死生観について考察した。

Aさんは儒教的な厳しい家庭に育った母のもとでチェサの準備を見てきた。結婚して夫とともに戦後すぐに帰国したが、夫が日本に帰っている間に朝鮮戦争のために、生まれてすぐの子供と長女を亡くしたことを恨に思い、娘のチェサを行ってくれる長女の夫の面倒を見続けたという話を聞き取った。母親は祖国といっても家族のいない地で幼子と戦争で娘を死なせた恨を、娘の夫を再婚させ、その子供たちにチェサをしてもらうことによって心を慰めた。

Bさんは東京から広島に親にいわれるままに嫁いだが、広島に住みだして6カ月をしないうちに原爆で夫は亡くなり、自分も被爆した。それが原因で苦労を重ね、それを恨として心に持っていたが、故郷に戸籍を取りに行ったら、意外にも嫁ぎ先に戸籍が移っていて養子までいた。養子は亡くなった夫の法事をしていて。また、自分が死んだ後に誰かが韓国に骨を持って行くと、養子がクツ(*)を頼み、原爆で死んだために骨も拾えなかった夫の霊を呼んで墓に納めチェサをするという。その話を父親にしたら、とても喜んだという。

植民地化のため祖国を離れ渡日した在日コリアンは民族的な差別の中を生き抜かなくてはならなかった。日本に渡ってきても、受け入れてもらえない日本社会の中で一世や二世は家父長的な生活様式を守り、結束しなければならないという条件の下で、儒教的な男尊女卑も温存したとすることができる。

恨を誘発する要因は個人的、社会的理由であるため、特定はできないが、抑圧されてアイデンティティを侵される恐怖にさらされるものが恨を強く抱きやすいという前提に立つと、植民地時代を経験して、宗主国だった日本のもとで差別を受け、儒教的な家父長制のもとで男性より下位に置かれた在日女性の恨が男性より多いと考えられる。

しかし、彼女らは現世では生き抜くため、目の前の生活を営んでいくだけで精一杯であった。現世では恨を解くのは難しく、また、亡くなった者の恨を解くことはできない。その恨を解く方法の一つが死後の祖霊とチェサの概念であり、死後は安らかに丁寧に祀られたい、祀ってあげたいという思いだったと考え

られる。(*巫女などが供え物を供え、歌や踊りを踊って鬼神や神に誠意を尽くす儀式)

第326回在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (2011年6月12日)

兵庫県香美町余部の曹鉄根の墓について

太田修

2007年3月の兵庫朝鮮関係研究会・兵庫県在日外国人教育研究会・神戸学生青年センター主催「山陰線工事と朝鮮人労働者の足跡を訪ねる旅」(3/17~18)に参加したことがきっかけとなり、曹鉄根の墓に関心を持つことになった。曹鉄根は兵庫県北部の山陰線鉄道工事で犠牲となった朝鮮人労働者で、その墓が兵庫県香美町(かみちょう)余部(あまるべ)に残されている。100年以上も前の朝鮮人労働者の墓が存在していること自体がめずらしいことで、しかも墓石には墓主の出身地や建立者の名が刻まれている。曹鉄根の墓から、生活レベルの日朝関係が見えてくるのではないかと、うまく調査できれば遺族を探して墓のことを伝えられるのではないかと、など期待をもって曹鉄根の墓について調べ始めた。

曹鉄根の墓についての最初の研究は、徐根植氏の「余部の墓地にあった曹鉄根の墓 - 山陰線敷設工事朝鮮人工夫の足跡」(兵庫朝鮮関係研究会編『近代の朝鮮と兵庫』明石書店、2003年)である。1911年に建てられた「鐵〔鉄〕道工事中 職斃病歿〔没〕者 招魂碑」(兵庫県新温泉町久谷の八幡神社境内に所在)に曹鉄根の名が刻まれており、その墓が余部の共同墓地にあることを紹介したのである。私も、2007年に徐根植氏が作成した「山陰線工事と朝鮮人労働者の足跡を訪ねる旅」パンフレットを参考に「守られた曹鉄根の墓」(拙著『朝鮮近現代史を歩く』思文閣出版、2009年)という小文を書き、墓石に刻まれた曹鉄根の出身地・慶尚北道「比安郡」が「病没」した1908年時点には存在していたことを示した。また、2010年8月に曹鉄根の故郷・親族さがしを目的に慶尚北道義城(ウイソン)郡をフィールド調査した結果、曹鉄根の出身地・慶尚北道「比安郡朴小(パクソ)」は今日の慶尚北道義城郡比安面西部2里朴淵(パギョン)だと推論できるとした(『青丘文庫研究会月報』No.247, 2010年11月「巻頭エッセイ - 曹鉄根の故郷を訪ねて」)。

今回の報告では、その後特に進展があったわけではないが、曹鉄根の墓研究の意義について考えてみた。曹鉄根が死んだ1908年は「韓国併合」前夜のことで、当時の新聞で朝鮮人労働者は「奇異」「無気力」「怠惰」な存在、「暴徒」として描かれた(拙著「韓国併合前後の朝鮮人労働者へのまなざし」『朝鮮近現代史を歩く』)。また、鉄道工事現場の主任技師の回想では、「朝鮮人労働者が相当に入り込んで」いて「空気は不穏であった」ので拳銃で武装していたという(内藤正中『日本海地域の在日朝鮮人』多賀出版、1989年)。このように、朝鮮人労働者に対して日本版「オリエンタリズム」が支配的だった時代に曹鉄根の墓が建てられ、それが今日まで残されている。曹鉄根という朝鮮人労働者がどのようにして山陰線鉄道工事に従事することになったのか、彼はなぜ犠牲となり、誰がどのような経緯から彼の墓を建てたのか、また墓はなぜ今日まで余部の共同墓地に残っているのか、そうした歴史を明らかにすることは、生活の場における日本人と朝鮮人の関係を考えることにつながる。

ところで、この点について私は先にあげた小文「守られた曹鉄根の墓」で、「直接朝鮮人労働者と出会い、その日常生活を目の当たりにした人々は、朝鮮人労働者の多様性に自覚的であり、その後も彼らを生身の人として記憶し続けたと言えるのではないだろうか」と書いた。しかし、その後の地元の人へのインタビューを通して、そうした理解は一面的ではないかとも考えるようになった。つまり、曹鉄根の墓が建てられ、今日まで残されていることは確かに重要な意味を持つのだが、その一方で、当時の地元の人々のあいだに「飯場は危険だから近づかんように」「暴動が起こる」などのうわさがあったことも語り継がれているという。本当はどうだったのだろうか、真実はそう単純ではなさそうである。今後、曹鉄根のような朝鮮人労働者のことが日本の地域社会、生活の場でどのように語り伝えられてきたのかという「記憶」の問題も含めて、もう少し深めていかなければならないだろう。「埋葬許可証」などの行政文書の調査や韓国の遺族さがしも今後の課題である。

青丘文庫研究会のご案内

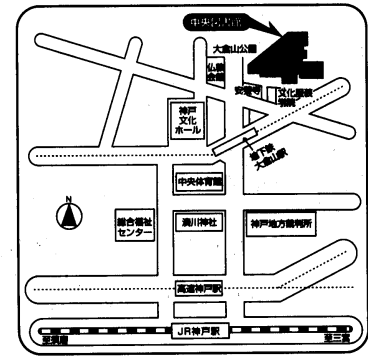
第327回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

7月10日(日)午後3時～5時

「京都市山科地区の近代と朝鮮人労働者」高野昭雄

朝鮮近現代史研究会はお休みです。

会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



新刊紹介 / 在日朝鮮人運動史研究会監修・在日朝鮮人資料叢書

叢書1

在日朝鮮人史資料集(全2巻)

第1巻 在日朝鮮人の状況

第2巻 在日朝鮮人運動関係、強制動員関係、協和事業関係、留学生関係

定価=本体24000円(A5判、総1100頁)

(『在日朝鮮人史研究』に収録されていた資料の再録です。『朝鮮問題資料叢書』『在日朝鮮人関係史料集成』(全5巻、三一書房)『在日朝鮮人関係史料集成<戦後編>』(全10巻、不二出版)に未収録のものです。)

叢書2

在日朝鮮人商工連合会編・樋口雄一解説『在日朝鮮人商工便覧 1957年版』

定価=本体6000円(A5判、280頁)

以上は第1回配本分です。この叢書は第12集まで続刊の予定です。

研究会では特価2割引で販売します。購入希望者は、飛田 hida@ksyc.jp FAX 078-821-5878 までお申し込みください。

2011年 韓-日 合同学術セミナー (韓国側から届いた案内の一部です)

<主催> 韓日民族問題学会、<参与> 在日朝鮮人運動史?究會(關東部会、關西部会)、<主題> 「戦後日本の市民運動を通してみる日韓関係と在日朝鮮人」<後援> 光云大学、湖南大学

<日程> 2011年8月5日(金): 学術セミナー、8月6日(土): 仁川港歴史探訪

<発表> 山田昭次(立教大)「関東大震災時朝鮮人虐殺事件をめぐる戦後日本の運動 追悼・調査から国家責任追及まで」、樋口雄一(高麗博物館)「私が見た戦後日本の朝鮮関連の研究と運動 -日本朝鮮研究所を中心に-」、飛田雄一(神戸学生青年センター)、「私が見た日本の戦後補償運動の役割と課題」、堀内稔(むくげの会)「神戸地域における朝鮮関連運動の役割と課題」<討論等> 金廣烈(光云大)、金太基(韓日民族問題学会長、湖南大)、朴晋雨(淑明女子大)、任盛模(延世大)、許光茂(強制動員真相究明委)、金仁徳(成均館大)、金ミンヨン(群山大)、呉一煥(強制動員真相究明委)、崔永鎬(霊山大)、鄭惠瓊(強制動員真相究明委)<フィールドワーク> 仁川港周辺における旧韓末の中国・日本の租界地探訪(地下鉄1号線で移動) - 仁川チャイナ・タウンで昼食の後、解散

【今後の研究会の予定】

2011年9月11日(日) 在日(玄善允) 近現代史(未定) 8月はお休み、10月9日(日) 在日(渡辺さえ) 近現代史(未定) 研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

9月号以降は、高野昭雄、全淑美、塚崎昌之、玄善允。よろしくお祈いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

- ・ ソウル合同セミナーを楽しみにしています。2年ごとに日本と韓国で開催されているものです。
- ・ 月報の本号に、申し込まれた方には青丘文庫会員証を同封しています。会員証は、年間購読料3000円をお支払いいただいた方にお送りしています。ただし学生で本ニュース不要、メールニュースのみでOKという方には希望により発行します。希望者はこちらまでご連絡ください。在日朝鮮人運動史研究会の年会費は5000円です。会員になると毎年秋に発行される『在日朝鮮人史研究』3冊を受け取ることができます。別途文庫の図書購入のための募金2000円も徴収しています。ご協力をよろしくお願いいたします。暑い日が続きます。健康に留意してご活動ください。(飛田 hida@ksyc.jp)

